

認定こども園やかまし村 「最優秀園実践発表会」 開催レポート

2020 年度「ソニー幼児教育支援プログラム」で「最優秀園」を受賞した認定こども園やかまし村の「最優秀園実践発表会」をオンラインにて開催しました。全国の認定こども園・幼稚園・保育所・小学校・大学、教育委員会等の教育・保育関係者約 310 名(端末数)の参加がありました。

以下に認定こども園やかまし村による開催レポートを掲載します。

発表会概要

1. 日時： 2021 年 11 月 6 日（土）9:00～12:30
2. 主題：「身近な生き物との日々のお会いの中で紡ぎ出される科学する心の芽生えとは」
～このさかなはなんていうさかな？けやきのもり水族館日誌から～
3. プログラム
 - 1) 開会式 9:00～9:30
 - 2) 公開保育 9:30～10:30
 - 3) 本日の保育について 10:40
質疑応答 ～11:30
 - 4) 記念講演 11:30～12:20
 - 5) 閉会式 12:20～12:30

研究発表

はじめに

認定こども園やかまし村は本園である認定こども園みどりの森の保育を継承しながら、より自然豊かな地で保育したいという願いの元、平成 29 年 4 月に仙台市泉区に開園した。本園では、子どもの興味を捉え、一つのテーマで一年間保育をすすめるプロジェクト型保育において「遊びの中の学び」を追求しながら、研究を進めてきた。令和元年度の 5 歳児は魚との出会いから魚を捕まえることをプロジェクトの中心にして一年間取り組んだ。5 歳児は園の裏門から出てすぐにある田んぼで稲作を行っており、その田んぼ脇にある幅 1.5m ほどの水の少ない用水路が魚との出会いの場となった。1 クラスに三人担任の配置があり、年長児は「田んぼに行きたい」という時には保育者がその都度裏門を開け田んぼに送り出し、園に戻りたい時は各自戻って来られるよう、田んぼには常時担任を配置する等子どもが遊びや場所が選択できるようにしている。

子どもたちが魚に興味を持ち始めたのは、一人の男児が田んぼ脇の用水路に木の棒を入れ「釣りごっこ」をしていたことだった。また、用水路の深みに大きな鯉の魚影を見かけたことも、さらに子どもたちの「釣りたい」という気持ちを強くし、そのことがきっかけとなり魚を捕まえるために釣り竿を工夫したり、罾をしかけたりと子どもたちの試行錯誤が始まった。罾を仕掛け始めるとザリガニばかりがたくさんかかるようになった。はじめは捕まえたザリガニを飼育していた子どもたちだったが、ザリガニは外来種であること、在来の魚を食べてしまうことを知りザリガニは魚を釣るために餌にすることを考えた。

初めは主に男の子が魚捕りをしていたが、秋頃にはクラス全体の興味に変わっていった。園から歩いて行ける二級河川の七北田川にも魚を捕まえに行き「カマツカ」という見たことのないような魚を捕ま

えることが出来、そのことによってさらに意欲が高まった。また、魚がどんどん増えたことで、クラスに水槽をいくつも用意し、たくさんの魚を飼育するようになった。

水槽内で稚魚が群れになって泳ぐ様子を見た一人の男児が「これじゃあ本物の水族館になっちゃうじゃん」と話したことがきっかけで“水族館を開きたい”ということがクラスの思いとして大きくなっていった。そんな中、水槽内で魚が魚を食べてしまうということが起き、それがさらに詳しく魚の特性を調べるきっかけとなった。それと同時に園外の用水路で捕まえた 20 cmほどの魚が、ウシガエルのおたまじゃくしを食べてしまい、子ども達から「悪い魚」と呼ばれるようになった。子どもたちの水族館を作りたいという思いをうけ、仙台市宮城野区にある仙台うみのもり水族館に行くことを計画した。うみの杜水族館では淡水魚担当の松川飼育員と出会い、子どもたちは水族館を作るにはまずは魚のことを知ることが大切だという気付きにつながった。また、松川飼育員が実際に使っている魚の図鑑も見せていただき、同じものを園でも準備し環境を整えた。そのことがきっかけとなり子どもたちの「水族館を作る」という思いがさらに強くなり、自分の図鑑を持参する姿や、図書館で借りた本を持ってきて魚を調べるようになった。魚調べをすすめるうちに「悪い魚」と呼ばれている魚は“オオクチバス”に似ていると一人の男児が気が付いた。また、鯉だと思っていた用水路の魚は、捕まえてみると“悪い魚”であるオオクチバスであることがわかった。子どもたちは当初水族館に大きな魚が増えたことをとても喜んでしたが、オオクチバスを詳しく調べてみると飼うことさえ禁止されている“特定外来生物”であることがわかった。水族館を開くまで飼うことができないかという思いで、担任がうみの杜水族館の松川飼育員に相談した所、「駆除するということが法律で決まっている魚だ、かわいそうだけど、駆除するしかない」という話しであった。すぐに子どもたちに、「オオクチバスは駆除しなければいけない」ということを伝えたところ、初めは「なんで?」「かわいそう」と話していたのだが、オオクチバスが在来種の魚を食べ在来の魚がいなくなってしまうということを伝えると、議論の末「日本の魚がいなくなるのはいやだ」「決まっているなら駆除するしかない」「悪い魚を飼っている悪い水族館にするわけにはいかない」という結論になった。駆除することへの葛藤がある中、「オオクチバスもえらかった、オオクチバスがいるからいろんなことがわかった。」という一人の男児の言葉に、この子どもたちなら駆除しても大丈夫だという確信を保育者も得ることができた。

駆除したオオクチバスのお腹からは卵が出てきた。卵が出てきたことをけやき会議で子どもたちに知らせると「かわいそう」という声もある中、「よかった、これが生まれてたらオオクチバスだらけになってた」という安堵の声も聞かれた。「オオクチバスだって死にたくなかったよね」という思いや「まだ用水路にはオオクチバスがいるかもしれないから捕まえなきゃ」という気持ちも強くなっていった。

2匹のオオクチバスを駆除したが、オオクチバスも水族館に飾りたいという思いから冷凍したオオクチバスを展示し、水族館をオープンした。子どもたちは調べたことを伝えたり、聞かれたことに応えながら飼育員としての仕事をやり遂げ、園の子どもたちや隣の小学校の子どもたち、保護者や松川飼育員を招待し、二週間の間開館し、約 300 人が来館した。

水族館の準備を進めながらも、“水族館を終えたあと魚たちをどうするか”という課題が出てきた。公園に行った時に「川に生き物を放さないでください」という看板を見つけたことをきっかけに“どうしてだろう?”と考え、話し合いを重ねた。初めは「放せばいいよ」と話す子どももいたが、在来種と外来種についての知識が深めていき、水族館を開園する頃にはクラス全体が「全部を逃がすことはできない」という結論を得た。外来種は逃がすことはできないものの、用水路で捕まえた在来種は「元の場所に逃がし

てあげたい」というクラスの思いとなった。

その後も用水路ではオオクチバスがいることを子どもたちが発見し、「魚を逃がすにはオオクチバスを捕まえなくちゃ」という思いから、子どもたちは橋作りやせき止めを計画した。スコップを使って水路を掘ることで次第に「工事をしたら魚がいなくなる」「魚の家がなくなるのは嫌だ」という声が聞かれるようになり、子どもたちの気付きがある度にけやき会議を行い、これからどうしていくかと話し合いを重ねた。魚のことを考えるうちに「橋に木を使ったら虫の家がなくなる」「人間だって木があって酸素がないと生きられないから無駄にはできない」と環境のことにも目をむけている姿も見られていった。そして子どもたちは話し合いを重ねた末、“工事はしない」という選択をし、むしろ編みで“ど”を編み、罟をしかけることと網を使い追い込み漁をすることにした。

卒園が迫る3月半ばまで子どもたちはオオクチバスを捕まえるために毎日挑戦し続け、やっと追い込み漁で用水路の深みにいるオオクチバス2匹を捕まえることができた。子どもたちからは歓声が起こり、「オオクチバスの時代は終わりだ!」という喜びの声や「これで卒園出来る」「やっと魚が逃がせるね」と安心した思いも聞かれた。

そして次の日、これまで用水路で捕まえてきた在来種の魚たちを逃がしに行った。この日を目指して過ごしてきたもの子どもたちからは「さみしい」という思いや「これから旅に出るんだな」とこれまでお世話をしてきたからこそ感じる達成感のような言葉も聞かれた。「いろいろ教えてくれてありがとう」と魚への感謝の思いがたくさん聞かれ、姿が見えなくなるまで手を振り見送った。

子どもたちは魚を逃がした後にゴミ拾いを始めた。用水路のゴミ拾いはこれまでも見つけたら拾っていたものの「もう工事はしない」と決めて以降、いつの間にか子どもたちの日課となっていた。ゴミを見つける時に必ず話に上がるのは魚のことでした。「ゴミがあったら魚がかわいそう」「ガラスがあったら魚に傷がつく」…そんな思いから子どもたちは最後の日まで魚のために川をきれいにしたいという思いを持ち続けていた。

最後に捕まえたオオクチバス2匹と水族館で展示したオオクチバス2匹は、オオクチバスの命が栄養となり毎年きれいな桜の花を咲かせてほしいという願いを込めて卒園記念として子どもたちが植樹した桜の木の下に埋めることにした。「魚を通していろいろなことがわかったね」とこれまでのことを子どもたちみんなで振り返ったある日、「オオクチバスありがとう」と子どもたちがみんなお辞儀をし始め、驚いたと共に涙が出そうになり、担任として子どもたちにこんな経験をさせてもらったことを感謝している。

飼育してきた魚への思いが“日本の魚を守りたい」という強い思いとなった。「オオクチバスもだいすき」「ありがとう」「オオクチバスのおかげでいろいろなことがわかった」という言葉は、子どもたちが心を動かす体験の中で、自然と向き合い命と向き合い、様々な課題を解決するために試行錯誤や葛藤を繰り返す中で、そのことに夢中になり、没頭し続けた結果得た真理そのものであり、それこそが幼児期に芽生える科学する心と同じ意味であると考ええる。子どもたちが卒園して2年目となり、昨年の年長児も用水路でオオクチバスの稚魚をたくさん捕まえた。駆除しなければならないことはわかっているものの、子どもたちが一年かけて得た学びをすぐに理解することは難しく、これからの課題を感じていた。一年生となった子どもから年長児に直接説明する場を設け、日々の保育の中で「命」の扱いについて考え、担任間でも話し合いを重ね、オオクチバスを煮干しにしザリガニや魚を捕まえる罟に使用した。そして今年、また用水路でザリガニがたくさんとれるようになったことをきっかけに、2年生となった子どもたちが来園し、説明の紙やザリガニの手作り模型を数人の子どもたちが家庭で作り、ザリガニについて説明

した。現在のけやき組の子どもたちも「かわいそう」「駆除したくない」という葛藤をもちつつ、「命」に向き合ってきた。そして先日、子どもたちは“食べる”という選択をし、保育の中でザリガニの唐揚げやみそ汁を作り、「おいしい！」とみんなでいただいた。

特定外来生物との出会いから 3 年目となり、新たな園の文化が出来つつあることを感じて。今年からザリガニもオオクチバスと同じように特定外来生物と定められ、駆除の対象となるため、私たちはきっとこれからもザリガニやオオクチバスとの向き合うことの難しさを感じて過ごしていくことになると思う。「かわいそう」と逃がすことは簡単であるが、これからを担う子どもたちと一緒にその先をこれからも一緒に考えていきたいと思っている。

公開保育

助言質問・秋田喜代美氏（学習院大学教授）

解説・小島 芳（園長）三浦 崇司（教頭）

オンラインでの公開保育を行った。

園庭から 5 歳児の遊びを中心に紹介をし、園長、教頭が解説を行い随時秋田先生に助言や質問をいただきながら進んでいった。

〈園庭の環境について〉

平成 29 年にやかまし村を建てた時には真っ平な園庭だったが、隣の大家さんの敷地の屋敷林や田んぼ用水路に囲まれた自然豊かな土地にあるので、滑り台、ブランコ、鉄棒はあるが、あえて大きな遊具は作らなかった。園庭には木をたくさん植えたということ、また子どもたちが登ったり降りたり隠れたりといったことの出来る環境を作りたかったので、土管を埋めた築山を真ん中に置いている。土管はこちらから向こう側に抜けることも出来るし、築山の上から降りて行って土管の中に入ることも出来る。築山の上から子どもたちが水を流して川を作ったりすると、どんどん築山が崩れていってしまうので、年に 2～3 回くらい職員や保護者総出でシャベルで下から土を上げるようにしている。庭には実の成る木を中心に植えるようにしている。どんぐりやカエデやユスラウメ、クヌギやくるみなども植わっている。お天気のいい日は子どもたちはたいてい外で遊んでいる。3 歳児 4 歳児 5 歳児の園舎は分棟になっており、それぞれの部屋に玄関があって「ただいま」と子どもたちが帰ってくる。そんな園舎を目指した。



5 歳児園舎の北側にはキッチンがある。ここがやかまし村を作る時に一番工夫した点である。子どもたちが何か作りたいとなったら、すぐに実現出来るような空間作りを目指した。南側には後からつけたロフトがある。園の西側にある「田んぼ」には日常的に子どもたちが出かけている。

〈5 歳児〉

「やかまし村の子どもたち」(岩波書店刊) がまさに家が 3 つしかない村の子どもたちの生活が描かれているお話である。ちょうどぴったりだと考え岩波書店にお願いし、園名にした。

子どもたちの興味に即した本や図鑑を集めて環境を作り、子どもたちがすぐに手に取って調べられるようにするなどの環境作りには常に気をつけている。以上児は各クラス 30 名の子どもに対し、3 名の保育者で保育を行っている。園の軒下にある藁は園のすぐ西側にある田んぼの稲を収穫した時に取れた物である。ホタルの水槽は偶然の出会いから園にもらうことが出来た。今後ホタルの会の会長さんにも園を訪れて頂き、用水路を見て頂くことになっている。



5 歳児では、泉ヶ岳登山での経験から、「川はどこからくるのか?」という疑問をもち、そこから地域の川の探検や園庭での川づくりを楽しむ姿が見られた。そのため、当日も園庭の築山から水を流し川づくりをしたり、担任と一緒に図鑑を見て調べたり、「かわ」という絵本に出会ったことがきっかけで、大きな紙に川の絵をという遊びの姿があった。また、蛍の幼虫を「広瀬川の蛍を守る会」の方からいただいたことから、幼虫の水槽をのぞき込み様子を見たり、水換えなどのお世話をする姿も見られた。遊びのなかでは、保育者と一緒に蛍について調べ、それを自作の図鑑を作って楽しむ姿も見られた。その後、用水路へ行き、仕掛けた罠の様子を見たり、新たな罠を仕掛けたりしながら過ごす姿が見られた。



〈4 歳児〉

4 歳児では、「夜のくるみ」という行事から、月や星に興味を持ち、望遠鏡づくりをしたことを紹介した。望遠鏡を作ったが、実際には肉眼で見るよりも小さく見え、そのことが次の子どもたちの興味へとつながっているところである。また、「夜のくるみ」での経験から次は「冬のくるみ」をしたいという思いが生まれ、それに向けて木の実などの自然物を使った飾りづくりをし、準備をしているところを紹介した。このことが子どもが主体的に作る行事となっていることを園長より説明をした。



〈3 歳児〉

3 歳児では、園庭でお店屋さんごっこをしていた。木片に絵の具を塗る遊びから看板づくりとなり、お店屋さんの遊びへとつながっていった。一人の女の子がコーヒー屋さんをする様子を中心に紹介をし、保育者が子どもの遊びを支えながら、遊びが続いていった。秋田先生からは、日常生活経験が遊びになっていることの助言をいただき、園長から、このような遊びが 3 歳から丁寧に積み重ねることが年長児の主体的な遊びや生活につながっていくことも語られた。



参加者からの質問内容

◎「グループ活動はしているか？」

子どもたちが自分たちで好きな活動見つけ、子どもが主体的な遊びをしている。グループ活動ということとはしていない。担任の関りや工夫ということは一口で伝えることは難しいが、子どもたちと保育者が対話をしながら、子どもたちのやりたいをどう支えるかということが保育者のやりがいとなっている。子どもと常に対話しながら子どもが本当にやりたいもの、やりたいことは何かを探りながら、それを支えるのが保育者の一番大切な役割ではないかと考えている。

秋田先生より質問 「担任の先生は開園時からずっと同じ保育者が担任を持っているのか？」

教頭 姉妹園と人の移動をしたり、新規採用等も行って、この5年間でずっと固定というわけではないが、3歳4歳5歳と持ち上がりで引き続き担任を持つということが多い。

◎「子どもたちのやりたいを支える中で、行事の取り扱いはどうなっているか？」

運動会、発表会、子どもがやりたいということのない行事は一切ない。

卒園式については行っている。卒園式も子どもたちの主体的な生活からつながっているため、子どもたちのやりたいことのひとつとなっていると、子どもの姿を見て感じている。

年長の最後には、後輩たちに伝えていかなければならないという気持ちが生まれてくる。そのため、発表していくということが起こってくる。それも子どもたちがやりたい時にやるということとなっているので、行事として設定しているのことはない。

◎「保育カリキュラムが子どもたちのやりたいを支えていくということだったが、例えばハサミの使い方や絵の具の使い方などのように全体に伝えているのか、教えていただきたい。また、10の姿などをどのように保育に入れていくのか教えていただきたい。」

全員に一斉に教えるということとはしていない。朝からとにかく遊んでいるので、ハサミなどの道具は使いたいときに保育者が支えながら、道具の使い方を伝えるようにしている。3歳でも切り絵にはまると、本当に上手にはさみを使って切り絵をしたりする。

10の姿について…保育に入れていくというよりは、私たちのこの保育をしていると間違いなく年長の最後には10の姿が育つと捉えている。

秋田先生よりコメント 自然に十分な意味ある体験が重なっていくことで結果として10の姿が現れているということだ。

秋田先生より質問「5歳児の部屋にキッチンがあるということだが、食の体験は3歳からずっと繋がっているのか。」

昨年度は野草を摘んでは部屋で毎日天ぷらにしたり、ザリガニを食べたりイナゴを食べたりもそうだが、みどりの森時代からずっと食育というのではなく、食の体験というのを大事にしているので、その流れもあり日常的な食の体験がたくさんある。

秋田先生より質問「十分な意味ある体験が重なっていくことで、結果として10の姿が表れているということか?」「週案は立てているか?」

園長 日案と週案が兼ねられている様式をとっている。今日の子どもの姿や遊びを振り返り、翌日の姿を予想し、それがつながっていくと週案となっていくという形のPDCAサイクルを用いたカリキュラムとなっている。

秋田先生 姿から振り返りが生まれ、見通しが出され、子どもが経験したことのカリキュラムはきちんとそこでできていくということですね。

◎「ザリガニを食べるときのアレルギーなどのリスクについては保護者とどうコミットをとっているか?」

アレルギーについては非常に意識をして取り組んでいる。食材のことをよく調べ栄養士と連携しながら食べるようにしている。何か普段食べることのないような珍しいものを食べる時には、必ず保護者に確認をしている。今回のザリガニを食べることも非常に心配であったので、管理栄養士の指導助言の基、管理栄養士が中心温度の測定や泥抜きなど、徹底して行ったうえで、食べるということに至った。

◎「生き物を飼う際に、子どもが触りすぎたり、モノのように扱うなどの姿はないですか?」

年齢が下のクラスではそのような姿は、たまに見られるが、その都度、生き物を飼う時の大事なことを丁寧に伝えている。そういったことから、子ども自身が生き物とのかかわり方を知り、子どもから大人に伝えるという姿も見られるようになってきている。

秋田先生より質問 「ルール的なことは全部子どもたちでいくのか?例えば、外に出るときなどの安全のようなことは最初に少しは共有しているか?」

なるべく小さな集団で外へ出るようにし、“先生から離れない”“道路に出ない”などを丁寧に教えながら集団を少しずつ大きくしていっている。また、外に出る範囲を少しずつ広げていくことで、その都度保育者が声をかけ、子どもが身に付けていけるようにしている。3歳から外に出ているため、あまり細かくダメなことを声を掛けなくても、年長児にもなると安全に子どもたちも遊べるようになってきている。

◎「子どものやりたいことへのサポート、保育者の支え方は、倉橋の誘導保育論のように、その自己実現のために刺激を与え、環境を構築するための方向付けくらいで保育者が支えると捉えてよいか?」

子どもたちの生活を保育者が下支えするというイメージでやっている。
受賞論文内の、オオクチバスを捕獲する最後の頃になると、保育者がついていくのが精一杯というくらい、子どもたちが主体的に動き出すので、そこに保育者が子どもの必要なモノなどの準備といった支え方になっていく。

◎「遊びを職員の中で共有したり、共通理解したりということはあるか?」

毎日担任三人で行っている。保育中も職員が子どもの様子を常に共有している。他のクラスの職員が子どもの面白い遊びの姿を見つけると、ビデオで記録をし、伝えていることもある。こういったことで、子どもの遊びや生活の中で、何が大事かということを職員間で常に共有し続けることができると感じている。

◎「魚を駆除したり、ザリガニを食べる選択を子どもたちがしたとき、先生方にも葛藤があったと思うが、職員間でもどんな話をしていたのか教えていただきたい」

論文の時には、オオクチバスも大事に飼ってしまっていた。そのため、これを駆除するのかとすごく葛藤をした。オオクチバスは特定外来生物で、飼っていること自体が法律違反なんだろうことは、子どもたちもよくわかっていたので、葛藤というよりは“せねばならない”と思って、駆除をした。

ザリガニについては、それらの学びを深めていない子どもたちにいきなり駆除を教えるということに非常に難しさを感じているので、卒園児に話をしたところ、「なぜ駆除をしなければならないのか」というプレゼンテーションをしてくれた。ザリガニの模型を作って実際にやって見せてくれたということもあった。何かあるたびに、その都度葛藤をしているとも言える。職員の中でもいっぱい話をしながら進めている。

◎「園として大きなカリキュラムや指導計画のようなものは作っていますか？」

全体的計画があり、そこに園として大事にしたいことや子どもたちにこんな風に育ってほしいということをしかりと書いてある。

秋田先生より質問「その全体的計画はどなたが作ったのか？みどりの森(姉妹園)と展開が共通なのか？」

主には私(園長)が書いている。細かい月案や日案は他の職員と一緒に書いている。“園哲学”というようなことは主に私が書いている。

◎「男性保育者は何名いるか」

やかまし村には教頭含め三名の男性保育者がいる。みどりの森にも三名いるので、学園全体では六名の男性保育者がいる。

◎「卒園生が小学校に行ったときにうまく適応できなかったり、戸惑ったりすることはなかったか？」

年長の最後に園の教育目標の一つでもある、「地球の一部と感ぜられる子ども」ということに到達したことで、私たちの教育保育が完結すると思っている。それこそがアプローチカリキュラムとなっていると考えている。そのため、子どもたちが十分に小学校に向けて準備をしていると思っている。

秋田先生への質問「小学校以降もこのような主体的な学びのために・・・」

いい園のことを理解している小学校の先生方もたくさんいるが、まだまだ小学校に入ったとたんに日々変わるということも多いので、私自身もそこを、小学校の低学年ってどうやったらいいのかをこういう実践から学んでいただきたいと思います。

秋田先生より質問「経験が豊かだと、アニメキャラ的なものはあまり見られず、自然であったり、生活から根ざして遊びがでてくるか？」

園長 アニメの影響は多少あるが、主流は生活の中の遊びになってくる。

秋田先生 それが質の良い保育で、そういう遊びの質が子どもが何が楽しいかがわかる。

秋田先生より質問「一年間を通して自然の中(田んぼ)に行っているということか？」

冬になると大家さんの屋敷林が下草や蚊がいなくなるので、行けるようになるので、屋敷林の中でも遊べるようになる。田んぼに関しては毎日どこかの学年が散歩も含め出かけている。

本日の保育の振り返り

各クラスの担任から今週中の保育の様子も含め、本日の保育についてご説明し、その後質疑応答を行った。

〈3歳児こうめ担任 渋谷美里〉

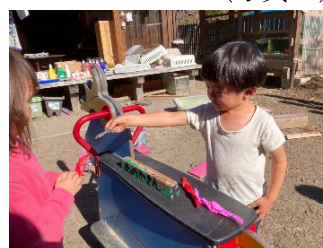
男の子たちが木片で飛行機や秘密基地作りをしていたことをきっかけに、今週はずっと木片を使った遊びを楽しんでいた。絵具で色を塗ることだけが楽しい子もいれば、それを組み合わせて基地作りを楽しんだりしている。写真に写っている子(写真1)は1歳児の男の子なのだが、3歳児のやっтерることを見て「やりたいやりたい」といって3歳児にまざって一緒に遊ぶなどというようなことも日常的にたくさんみられる。好きな木片を持ってきて、好きな色に塗って遊ぶ姿が今週はずっと見られていた。昨日からこの木片で看板作りが始まった。4月からずっと砂でケーキを作ってケーキ屋さんとか、葉っぱを使ってアイス屋さんとかをたくさんしてきたので、看板を作ったことで盛り上がり、何屋さんを開きたいかを考えていた。みんな一緒にやっているようにみえて、一人一人が自分の好きなことに没頭しているという時間である。(写真2) ジュース屋さんコーヒー屋さんアイス屋さんがそれぞれに盛り上がっていて、そこでお客さんに来て欲しくて、またお客さんを呼びにいくといった形でずっと遊んでいた。今日もこの遊びが始まるのではないかという予測の元、担任が準備をして今日を迎えた。本日も登園後すぐに「コーヒー屋さんをやるんだ」と言って準備を始め、昨日の看板づくりの途中の子もいたので、看板を作りたいという声がり、すぐにその遊びが始まった。右の写真(写真3)は飴屋さんをやっているところだが、昨日は看板作りで終わってしまっていたので、今日は飴を作るといってぺろぺろキャンディも欲しい、棒をながくしたのも欲しいと言って、飴屋さんがとても盛り上がっていた。写真の男の子はここが自分のレストランだと言って、ポテトを準備して待ち、自分で好きな空間を作り、そこにお客さん呼んでという自分の好きなことをただただ没頭してやるという年少らしい姿が見られたと思う。男の子のフライパンの中には黒い物があって、それをすくおうとしている様子が見られるが、これは秘密のスープ屋さんということで、築山から採ったキノコを入れ、さらに炭を削って入れて真っ黒いスープを作っているところである。(写真5) 昨日は日中部屋で積み木をしていた子たちも「何なに？」と興味を持って出てきたが、ちょうどお昼ご飯になってしまい出来なかった子もいて、今日はお店屋さんをやっている姿もたくさん見られました。こちらは長いホースを使って、遊んでいる姿である。年長が築山で水流



(写真1)



(写真2)



(写真3)



(写真5)



(写真6)

しをやっていたと思うが、これは昨日の姿で、ホースを土の中に埋めてから、じょうろでホースに水を流すことで、土から湧き水のように水が湧いてくる仕掛けを作っていた。(写真6) こんな風に子どもが「不思議でしょ？」と思った姿を先生に「見せたい見せたい」といって、人に知らせて喜んだりだとか、不思議さを友達と共有したりだとか、びっくりしてもらってすごく喜んだりする姿が、見られていた。これこそが科学する心だなと思いがらみしていた。今日もこの続きをやるのかなと思っていたが、今日はこの続きではなく、積み木遊びをしていた。積み木の様子は映らなかったのだが、今日はそんな過ごし方をして



(写真4)

いた。

玄関を入ってすぐのところ、昨日サーティワンのアイス屋さんをしていた女の子達が木をずっと運んでいるので、何かと思ったら水をこぼしてしまったことをきっかけに、玄関前に木片で囲んだ空間を畑にして、種を蒔いて遊んでいた。スイカが腐った～とかカブトムシに食べられたから腐っちゃったんだとか、きっとけやきさんが夏にそんな経験をしていたことを見て、その経験が今日の畑作りに繋がったのではないかと思い担任としても楽しんでみていた。

〈4歳児くるみ担任 須藤真由〉

本日は事前動画や、資料でも触れていたが、子どもたちは「ふゆのくるみ」に向けて室内を飾り付けたいと、木の実を用いた飾り作りをしたり、園庭で拾ったモミジでの染物を主に楽しんだりしていた。現在園庭や園周辺は秋の自然にあふれていて、「今日も田んぼに行こう」「落ち葉を拾いに行こうよ」「セイトカアワダチソウで足湯が出来るんだって、やってみたい」と子どもたちは毎日のように園庭や園のすぐ裏にある庭やその先の農道に足を延ばしては様々な草木に触れて、摘んできては飾り作りや染物等を楽しんでいる。

飾り作りをする際に、子どもたちの必需品となっているこのどんぐり穴あけ機。本日も部屋の一角でこのどんぐり穴あけ機を囲んで座り「次はどんぐり帽子に穴をあけてみたい。そこに玉ねぎの皮で染めた毛糸を通してみるんだ」「このクヌギはなかなか穴があかないな。難しいからどんぐり手で押さえててくれない？」などと友達とやり取りを楽しみながら、時折手を貸し合いながら、飾り作りを楽しんでいる姿がある。この冬のくるみにむけての飾り作りをする中で、女の子の多いクラスということもあり、「ネックレスとかもいいんじゃない？」「私は髪の毛を結ぶゴムを作ってみたいな」「たくさん作ってお店屋さんしてみても楽しいよね」と木の実でアクセサリを作り、おしゃれを楽しむ姿が見られているところである。こうして、様々な木の実を用いて遊ぶと共に、季節ならではの落ち葉を用いて遊ぶ姿もよく見られている。本日は部屋のキッチンでモミジを用いた染物を楽しんでいた。先週は落ち葉でのたたき染をしてみたらどうなるのかと白い布に落ち葉を置いてたたき染を楽しむ姿がみられていた。そこではたくさん叩いてみたら色が出た、ここはあんまり色が付かなかったからもっと叩いてみたらいいんじゃない？こっちの落ち葉だとどうなるかな？等、試行錯誤しながら楽しむ姿が見られていた。この経験を通して、本日の染物はたたき染の時のように、白い毛糸を入れてみたら赤く染まるのではないかと期待で胸を膨らませていた子どもたちだったが、実際には思っていたよりも鮮やかな色にはならなかった。しかしながらそれでも「どうやったら赤くなるのだろう」とその不思議さや面白さを感じている様子が見られていた。また、染めるために煮出したモミジの葉は捨ててしまうのではなく、取っておきたいから押し葉にしたらいんじゃないかという子どもたちのアイディアで、厚い図鑑に大切に挟み込んで押し葉を作る姿も見られている。こうして秋の自然に触れていく中でもっと知りたい、このどんぐりはなんて名前なのだろうと木の実図鑑を開く姿も見られている。「どんぐりって食べられるんだね」「どんぐりだんごってくるみさんでも作れるんじゃないかな」「この形のどんぐりって見たことないよね。やかまし村の近くにもあるんじゃないのかな」と目を丸くして新たな発見を楽しむ様子も見られていた。そして、事前動画や資料でも触れた望遠鏡を手作りしたことで、星や月への興味も広がっているように感じている。冬のくるみでは皆で冬の空を見たいという思いも出てきている。この写真の右側（写真あさひ）のように望遠鏡の横に星の本や星座の本を並べていると、手に取ってみては冬の夜空が載っているページを開いて「ふたご座だって。人が二人並んでいるみたい」「かみのけ座って書いてあるよ。面白い名前！」などと冬に見られる星座の一つ一つを指さしながら、冬の夜空を思い描いてみたり、こういう星座を見てみたいとそれぞれのお気に入りの星座に出会う姿も見られているところである。



〈5歳児けやき担任 大江文〉

事前資料にも書いたがホタルブクロとの出会いをきっかけに、子どもたちはやかまし村の用水路でホタルを見たいと強く願っている。そのために今、用水路のザリガニやオオクチバスを捕まえ、食べて駆除したり、ゴミを拾ったりしているところである。また、自分たちの用水路がどうやったらきれいに出来るのか考えているところでもある。このことから川への興味も広がっているようで「この用水路はどこにつながっているのかな」とある男の子が言ったことから、地図をたどっていくと七北田川に合流する。先月泉ヶ岳登山に行った時に七北田川の源流も見えてきた。そのことがきっかけで築山で川作りを楽しんでいるところである。今日も流れていたと思うが、水を流し、川が流れて海にたどり着くというところを子どもたちは楽しんでいる。また、泉ヶ岳登山をしてやかまし村の川と泉ヶ岳の源流がつながっているということにも子どもたちは気が付いて、絵具で一生懸命地図を書いているところである。ザリガニを捕まえたところにはザリガニを書き、すごく汚れた場所は汚れた色で子どもたちが表現している。ホタルはまだ見たことがないが、泉ヶ岳の源流の水はとてもきれいということに気が付き、ここにもホタルがいるねと言って、ホタルを書いているところだ。



11月3日にホタルの里親になるために「仙台市ほたるの里づくり協議会（青葉山ホタルの会）」からホタルの幼虫を預かることになった。休日だったので、参加できる子どもたちと一緒にホタルをいただきてきた。子どもたちは「かわいい」といって幼虫を見つめていて、ぼくたちわたしたちがホタルの幼虫のお父さんお母さんになるだねと期待に胸を膨らませていたところである。ホタルの会の方からいろいろと教えてもらい、園に戻って子どもたちと一緒にホタルの幼虫の家作りを始めている。ホタルの幼虫の餌はカワニナで、そのカワニナの餌が落ち葉であることから「落ち葉を入れるといいよ」と教えてもらい落ち葉を拾ったり、隠れて遊べる場所があるといいねと石を持ってきて入れてる様子もある。図鑑等を見ながら一生懸命調べているところである。18匹がどこにいるか見たり、名前を付けたりしながらホタルの幼虫に夢中になっている姿が見られる。今日も落ち葉を入れていることで、水が茶色に濁ってしまっていたことから水換えをしている姿もあった。また昨日オオクチバスを1匹捕まえて、そのオオクチバスをどうするかということを話し合った時に、もっといるからもう一回おびき寄せたいということで、今日も見に行ったが残念ながら今日はオオクチバスが取れなかった。子どもたちは川がきれいになっている証拠かなといって川探検等も楽しんでいるところである。

秋田先生より質問 「例えば3歳児も4歳児も5歳児も、例えば川に行こうと言ったらそれから計画をして、みんなで源流を見に行ったり。子どもが夜のくるみから冬のくるみって言ったら、じゃあそれをやっていこうという中で、とても柔軟に、それから木片から今度は看板になっていったり。そういうところをどう支えていくのかということが、子どもの思いをどうやって聞き取って、活かすのかっていうところがとても魅力的なところであり、難しいところでもあるのではないかと思います。そのあたりのところを伺いたい。」

渋谷 子どもたちが一クラスに30人いて、やりたいことがそれぞれ違うわけで、それを私たちは毎日見守っていて、こちらから「全員でこれをやろう！」とか「これをやらなきゃダメだよ」という時間はなく、子どもたちが本当に遊ぶ時間がたくさんあって、その中で年少の時から好きなことを見つけて、それを一人でずっと楽しんでいる中で、なんとなく友達と繋がってきて、友達が増えてきたところで年中さんになると「夜のくるみ」のようなものを経験し、なんとなくクラスがまとまっていく。本当に長いスパンの中で私たちも見守っているの、子どもに「やらせなきゃいけない」ということがなく、子どもたちの好きなことを見守っていくというこちらの思いのある中で過ごしている。そこを一番大事にしたいと考

えている。またそうやって過ごす中で年長くらいになると、遊んでいるというよりは仕事っぽいというか、川をきれいにしなければとかいうことがあると、保育者がさせるために何かしてるのではと、私自身がここで働いていなければと思ったと思うが、そういう積み重ねがすごく楽しくなって行って、遊びと仕事が混ざっているようなこと、みんなと一緒にやるということがどんどん楽しくなって行って、それが自分たちがやらなきゃとかいう風に育っていくのだなと思っている。難しいと感じることもたくさんあるが、私たち職員もそれが楽しい。

《チャットで寄せられた質問や、事前にあった質問への返答》

◎「職員の研修や話し合いの時間をどう持っているのか。振り返りの時間の確保はどんな風をしているのか。」

教頭 その日の保育の振り返りや、今現在保育の中でリアルタイムで起きていることというのは保育の中で担任三人で「今こうだよ」「今だれだれが川に行きたいって言って、今どうしてもやりたいから川に連れていきます」「川作りの中でこういうことが起きています」等、とにかくリアルタイムで保育者が話しをしているという時間が多くある。職員室に戻ってから改めて座って振り返るという場面もあるが、多くはこの「リアルタイム」が占めているのかなと思う。職員の中で対話的に保育をしていくということは園の中でも大事にしているところではある。その関係性が出来るまでも、職員のチームになるということまでは職員もなかなか苦勞するところではあるが、やはり子どもの主体的な遊びとかやりたいこと、興味関心に沿って保育をしていくということではとても大事なところであると考えている。とにかくなんでも話すということを担任間で言い、そこで迷った時には隣のクラスの先輩に聞いたりだとか、それでもなかなかうまくいかない時には職員室まで走ってきて「今こうなんです」ということを話したり、とにかくリアルタイムで共有し続けることが大事かなと思っている。その他にも職員室に戻ってから日誌を書いたり事務仕事をしたりしながら話すこともあるが、一人ひとつの机とか一人ひとつのパソコンとかがある環境ではなく、真ん中に大きい机があって、そこに席も決まっていなくて、来た人が座れる場所に行って話しをするというような環境である。そこで隣のクラスが今日こんなことあったんだよねと話しをしたら、私もその場面みていたよというように、その隣の担任が近くで見ていた子どものことを話したりといった状況で、子どもの話しがされていくというような環境になっている。

◎「自由な遊び中心の保育をやっているのに、ホタルのことに年長児が全員で関わっているのか？また、経験せずに終わってしまうことはないのか？」

園長 全員に統一の経験をさせなければいけないとは考えていない。子どもたちが「やりたい」ことをやっていく中で、様々なアプローチをしながら年長の最後にたどりつく。それこそ10の姿ではないが、それらがすべての子どもたちが必ず経験するんだという風に思っている。全員が必ずやらなければならないと思っはてはないが、例えば年長の駆除の問題であるならば、それは全員で考えたいと保育者が思った時に「このことは全員で考えようよ」といろんな形で子どもたちにアプローチをする、やはり子どもたちは「それはクラスの大問題だね。みんなで考えるよ」と必ずなっていく。日中は自由に遊んでいる子どもでも、ちゃんとクラスの帰属意識というか「私はこのクラスの一員だ」という気持ちが芽生え、クラス集団作りがなされていくと、経験せずに終わったり、強制的に関わらせたりせずとも子どもたちはちゃんとそこに関わっているし、なぜかわからないが子どもたちの間でも情報が共有されている。

午前中に「Jくんがオオクチバスを捕まえたらしいよ」という情報が、午後にはクラスの子どもが全員知っている。こちらが全員を集めて伝えなくともちゃんと知っている。子ども同士が活発に会話を交わしたり、先生たち同士が「Jくんオオクチバス捕まえたらしいよ」というような対話が日常の中で丁寧に行われていくことで、全員の子どもがいつしかちゃんと均一の経験をさせなければならないとこちらが思っはてなくとも、子どもたちそれぞれがそれぞれのアプローチで、幼児期に体験せねばならないことについては会得していくのではないかなと考えている。

◎「特定外来種のことや駆除というキーワードでの質問について」

渋谷 論文を読むと「駆除」というところがすごく目立ってしまうと思ったが、私としては何を大切にしてきたかという、目の前の水槽に入っている魚たちをどうやって生かしていくかということだけをずっとずっとやってきて、考えてきて過ごしてきた。餌をやらなければいけない。水槽掃除をしなくてはならない。魚がかわいそうだ、また死んじゃった、なんでだろう。白くなっているのは病気なのか、それはまた飼育員さんに聞いてみよう、手紙を出そうみたいな感じで、どうにかしてその魚たちを生かしたい、魚たちを生かすにはどうすればいいのかということを経験をすごくすごく考えてきたのであって、駆除を一生懸命やったわけではない。その中でオオクチバスが特定外来生物だったという事実がぶち当たってしまったというのが事実である。それなのに「駆除」というものが目立ってしまって、命を無駄にしているとか、命を粗末にしているのではないかと、そういうことはもちろん担任でも考えた。この保育の中で、今までお世話にしてきたものを殺さなければいけないとなった時に、えっ？そんなことしていいのかなとももちろん、私自身も思った。ただ子どもたちはもうその時にはファンタジーの世界にはいない。子どもは水族館を開いて、その時には研究者や飼育さんも読んでいるような図鑑を読んでいるので、子ども向けの図鑑やわかりやすく書いている絵本みたいなものではなく、本物の図鑑を読み込んでいるような状況に子どもたちはなっていた。そこで子どもたちがこの特定外来生物だということに気が付いた以上、「これはこのまま飼っているのはダメだってなってるよ」と気付いているのに、保育者が嘘をつくわけにはいかなかった。やはりその時、保育者としてどうしても「殺す」ということには抵抗もあったし、駆除しなくちゃいけないということをどうしようと悩んだ末に、飼育員さんに連絡をしてどうにか飼うことが出来ないか、どうにかこのまま飼っていることは出来ないかということで相談した。

でも、やっぱりここで（日本で）生活している以上、オオクチバスは飼っていたら罰せられる対象であって駆除が決まっていると言われた。私たちは子どもたちにそのことを隠すことももちろん、子どもたちが真剣だからこそ私たちも真剣であるから隠そうとか、ちょっと曖昧にしようとか、そういうことは全然保育者として思わなかった。むしろそうすることが失礼だなと思うくらい、子どもたちは真剣だった。子どもに事実を伝えてそこからどうするかということを考えていくしかないなということは保育者たちみんなが相談した。もちろんオオクチバスだって大切な命ということにはわかっているし、ただ駆除してしまって「これは殺せばいいものだ」という風に子どもたちが思ってしまうのではないかとということももちろん私たちも葛藤した。しかし、子どもたちは絶対そうはならないはずだと。経験の中で「殺そう」「じゃあ殺そう」とは絶対にならないという子どもたちへの信頼も担任の中ではあった。不安もあったがその時にハヤタくんが「オオクチバスのおかげだった。オオクチバスがいてくれてよかったね。」と言うことを言葉にして出してくれた時に、この子たちだったら駆除ということの事実を伝えても大丈夫だったんだということで、担任はとても安心してホッとした。一つの命だからホタルはよくて、ザリガニはダメで、オオクチバスもダメで、トンボは殺したらかわいそうだなというような。そこには矛盾があるということを経験を、私たちも生活の中でずっと考えている。だから殺せばいいやという子どもにだけはならないようにということは考えながらやっている。子どもの方が私たちよりも大人なんじゃないかと思う部分もたくさん経験の中で出てくる。やかまし村の子どもたちが「じゃあ殺せばいいや」というふうにはならないということは自信を持って言える。これから子どもたちもそういう思いに繋がっていくように、私たちがサポートし、見守っていければなと思っている。これからも悩み続けていくだろうとは思っている。

◎「子どもたちの自主的な活動で遊びを広めたり深めたりして欲しいのだが、様々な課題や問題に突き当たり、先に進めず子どもが悩むことがある。悩むこと自体はいいことだと思うが、そこであきらめて止まってしまうのももったいないと考えている。子どもたちの自主性を尊重しつつ活動を広げたり深めたりしていくための保育者の工夫や声掛けの仕方等があればぜひ聞きたい。」

大江 まず子どもたちが最初にザリガニを捕まえた時には、子どもはうれしかったので「やった〜！」と持って来た。そこで、魚に詳しい渋谷に子どもたちが聞きにいったら「ザリガニだね。外来種だね。おとしの子どもたちは駆除していたんだよ」ということを教えてくれた。そこから子どもたちの葛藤が始まった。駆除ってなんだろう外来種ってなんだろうということがきっかけで、やはりホタルを見た

いということに繋がっていった。その後ザリガニもやっぱり駆除しなきゃということに繋がり、子どもたちが葛藤していった。その中でも子どもたちは駆除するのはかわいそうと言っている子もいたので、駆除を絶対した方がいい、駆除はやらない方がいいと一つ一つの問題にぶつかって、子どもたちが葛藤してきた姿があった。それを私たちはすごく大事に考えている。子どもたちがどう問題と向き合っていくか、子どもたちがどうやってそれを乗り越えて考えていくかということを大事にしたいなと思っている。しかしながら私自身もすごく葛藤してしまい、子どもたちを引っ張っていこうとどこかでちょっと思ってしまった部分もあって、常日頃から園長に助言をもらっている。「子どもたちの言葉をちゃんと聞いてる？子どもたちの言葉を大事に聞いていたら絶対にそこにヒントがあるよ」というような言葉をいつもかけてくれているが、そういう子どもの言葉に耳を傾けることが私たちは本当に大事にしないといけないかなと思っている。今日の前にいる子どもの言葉と姿とそれを見守る大人が隣にいるということが、とても大事なのではないかなと考えている。

◎「論文を作り上げていく過程について」

園長 実践発表会を聞きにいらしている方の中には「ぜひうちも！」という方たちもたくさんいらっしゃると思う。かつても私たちがそうであった。私は今までみどりの森で三本、やかまし村で三本、論文を書いてきたが、今回やかまし村で論文を書こうと思ったのは、みどりの森の時は保育の中で「あっ、これは科学する心につながるね」というように思って論文を書いてきたが、今回のこの実践については、この実践が終わった時に「これほんとにすごい実践だな」と思って、この実践をなんとか形に残したいと思ったことが論文を書いた動機だった。3月にコロナがあって、2カ月くらいのシャットダウンになり、じゃあここから書こうと。渋谷も自宅待機で休んだりしていたので「論文書くから準備してて」ということを言っていた。そしてコロナによる自粛登園が終わった後は結局夏休みが一番佳境だった。とにかく渋谷が書いたり、写真に残していたものを、全部一緒になって論文にまとめ一緒に作ったが、きちっと記録が残っていたということが一番大事な点だった。何月何日何があったかということが手に取るように思い出せた。あの時あの子がこう言った、この子があの時釣りを始めたということが写真と記録でしっかりと残っていた。その過程を私も園長として陰ながら見ていたということで共に論文を書くということがとてもスムーズに出来た。私や渋谷等、中心になって書いた人間たちは書き終わった後も、この論文が愛おしすぎて、何度も何度も、今でも読み返すってことをするくらい、そのくらいいい実践であったなと今でも思っている。論文を書いているのはこども園なので、一応夏休みがある。2・3号の子どもも増えてきているので、夏休みもなかなか職員体制を作るのが難しいが、夏休み中は渋谷が何日も保育から抜けて、私と共に論文を書く時間を取った。質問の「園長は5歳児を含め直接保育現場に入られているのか」というのは、直接ずっと保育をしたわけではないが、要になる時っていうのがあって、そういう時は必ず渋谷が「今日オオクチバス取れると思うので、先生お願いします」みたいに言われたら、その日は朝から行って、朝からずっとオオクチバスの現場にいる。渋谷たちは水に入っているの、私が写真を撮った。その時は実はまだ論文を書くとは思っていなかった。論文を書こうと思ってそれをやっていたというよりは、やはり彼らが一生懸命に、彼らとは子ども達である。子どもたちがこの実践に一生懸命向き合っている姿を私も後ろで、一生懸命後ろで見せてもらっていたことが結果的に論文につながった。四本の論文を書くのはすごく楽しくて、論文書くのは大好きなので、苦労があったかと言われると、実は渋谷とも書き終わってから「書き終わっちゃったね～」と思うくらい、実は論文を書くのが楽しくて、まとめるのが大好きで、今もソニーには出さないのだけど、今年の年長児の実践もソニーに出すような写真の入ったミニ論文という形でまとめてそれを卒園する保護者たちにお渡ししている。みどりの森は21年保育をやっていて、みどりの森の保育に対する信頼があるのが、やかまし村はまだ今年で5年目に入ったところなので、なかなかこの遊んでいる保育の内容が理解していただくのが難しく、実はこういうことを大事にしているんだということをちゃんと保護者に伝えたくて、ミニ論文という形でやっているとこである。今年も、大江には今言ったという感じだが、ミニ論文を作ることになるので、しっかり記録を取っておいて欲しいなという風に思っている。

記念講演

秋田喜代美氏／学習院大学教授

「身近な自然環境の中で育む自然環境感受性：科学する心を育む環境とは」

身近な自然環境の中で育む自然環境感受性：科学する心を育む環境とはということでお話しさせていただきたい。やかまし村の論文はソニー教育財団幼児教育支援プログラムが始ってちょうど 20 年目の最優秀受賞園ということになっている。園長が「いい論文だと思った」と言っていたが、審査員の中では委員によっては様々な意見が出るころではあるが、この論文についてはみんながうなった、満場一致でいいといった論文だった。科学する心についてお話しすると、2000 年に立ち上げた時に建てた理念がある。最初ソニーさんから「レジオエミリアやハーバードの保育実践を紹介して欲しい」ということであつたが、それ以上に日本の保育実践の方が優れていると思うからそこに学ぶことにしませんかとお伝えし、保育実践の良さの共有ということがキーワードになっている。良質な保育は全国でやられていると思うが、特に科学する心と私たちが考えているところで、そこにクリエイティビティ、創造性独創性がある実践ということが、井深さんが立てられたソニーのソニー教育財団だからこそ出来る。そうでなければ国全体や自治体がされればいいことなので、そういう意味で非常に財団の特色あるプログラムになっていると思う。以前に雑誌でお話しさせていただいたが、このプログラムは歴史に残る日本の良さを追求したプログラムになるのではないかと汐見先生、武藤先生からお話し頂いた。特徴は保育の研究者だけではなく、自然科学の専門家の方たちともジョイントで行っているということであるし、国の指針や要領をないがしろにする気はないが、皆さん今回の論文に SDGs や ESD といったこととのつながりを感じられたのではないかと思います。こういったことは要領や指針には書かれてはいないけれども、未来志向でやっていくということではないか。公開保育ということが 20 年前には私立や民営では難しいと言われた時にも、どんな形でもいい保護者や近隣の方たちでも構いませんから開いて下さいとお願いしてきた。そのことによって様々な類型を超えた学びのネットワークが構築できる。今日はこれがオンラインであつたということにより、カウントしたところ、270 名以上の方がご参加してくださっているので、私自身緊張感もあるが、そういうような中でそれに匹敵する発表や保育を見せてくださったということではないかと思う。事例を共有すること、HP でも事例を見て、メルマガや最近では Facebook でもネットワークが作られ、つまりそれによって、誰もがお互いにコレクティブインパクトというのか、みんなでより良い保育の変革、それも科学する心っていう形でそれを生み出していくということが、大事であり、それが 20 年目に誰も想像しなかった形で、コロナによってオンライン研修ネットワークになったり、今日も事前動画がとっても面白いなと思って視させていただいた。まさに保育のプロセス、二週間前の保育を視て、今日の保育を視るという「ああ、望遠鏡はこういう風になっていたのか」とかいろいろな展開を知ることが出来る工夫もしていた。そして財団のパンフレットにある 7 つの「科学する心」が今日の実践の中にすべて含まれているというところに、大きな特徴があるのではないかと考えている。自然に親しんでいるけれども、自然の難しさに出会ったり、動植物と親しむからこそむしろ苦しんだり。そういった様々な側面が生かされた論文になっているなと思っている。そして私どもが大事にしていることは特定の一人の人ががんばったというより、園そのものが、ネットワークそのものが良くなっていくということを願って作られているプログラムであるということである。

本日のやかまし村の実践についてである。10 年前に姉妹園のみどりの森に最優秀園で伺った時に、つながっているけれど、やはりその地にある、その地の職員の方々独自の展開というものも生まれている。そこに学び、そこに感じた特徴についてお話しし、最後に私が最近考えていて、いろんなところでお話しさせていただいている自然環境感受性についてお話しさせていただきたい。

まずはやかまし村の実践についてだが、皆さん最優秀園の講評はごらんになっていると思うが、これは主に審査委員長である小泉先生がお書きになっている。私はここにすべて入っていると思っている。最初からずっと出ているように特定外来種と出会う、本当に命の問題と子どもが出会っている。自分も地球という感覚まであったかどうかはわからないが、自分も地球の中の一つと感じながらそこに思いやりとか、人生の知恵みたいなものが入っているということ、そして、保育者も子どもも共に揺らぎ、これが

キーワードだと思う。揺らいでいるから、それが結果として論文になったり、結果として10の姿の表れになったりしているけれど、この目的と手段が逆転していないというところが大事なところだと思っている。科学する心ということでは、本質に迫る実践だと思っている。この前この話をマレーシアでもさせていただいているが、地球規模での今生物が共に共生するということであったり、ESD 環境教育の重要性ということが言われている。生物多様性というのはその条例が作られたり、世界的にも難しい問題である。それがまさにやかまし村の子どもたちが子どもの目線から始めているというところがとても大きなところだと思う。命を大切にしましょうという話しではなく、むしろそれを知るために生きている命を先ほどから出ている駆除という形でしなければいけないということがわかったりしていくというような追求。それからどうするかということを考えていくのに、答えは無い「難題」ですね。「アポリア」と言っているが、問題というのはすぐに解決が出来る。課題は探求する。難題は解け得ない問題である。これは中学や高校、大学でやるのではなく、幼児には幼児なりのこうした問題と課題と難題というものがある。そうした時にもし自分達で抱えられなければここにあるように、飼育員さんとか地域に開いていながら、それによってかえって豊かにしていくというような、そこにまた探求が生まれていくというようなこと。専門家の知恵とも出会っていく、その双方に必然性があるということがとても大きいなと思っている。講師の方をお招きして来ていただきましたというように実践もとても大事だが、むしろ子どもがどうしているか、一番課題の切実に悩んでいる時に話しを聞くということこそ、一番知りたいことを深く学ぶチャンスだと思う。そういうことがうまくいかされているということ。

そしてまた表現活動としての水族館を作りたいとか、それから魚拓にするとか。そしてあの卒園式の時の終わりの言葉に表現していく、子どもたちがまた自分たちの出会いを表現していくというところに、子ども時代からの持続可能な社会との関連性やその観点からの重要さというものがあるということである。小泉先生が科学や倫理の本質に迫る実践と書かれているが、まさに倫美という「私たちはどう生きるのか」ということを子どもと共に問うというところに、この実践の深さがあると思う。愛情や愛着の重要さ、そしてそれを自ら子どもたちが多様な形で表現や作るということにつなげ、そしてその中で葛藤しながらやっていくということがこのやかまし村の実践の抽象的に言えば最も大きなポイントなんだろうと思っている。

子どもの育ちというので「課題解決」ではなくて「課題とどう出会うか」ということを、小島先生も渋谷先生も同じように語られていたのがとても印象的だ。この園の先生方は自分達のされていることをきちっと説明をするということが出来る園だと思っている。葛藤や揺らぎに向き合いながら次の局面に開かれていくという在り様。それが幼児向けの課題ではなく、本当に大人も考える。「こんな難しいことを」ということを、みんなが考えていく対話がある、それを保育者が出すことなく、共に探求するということで葛藤の連鎖というものが、人為的でなく起こっていくということの面白さということがあるんじゃないかと思う。ではこういう実践はやかまし村にしかないかというと、私たちの身の回りにある色々な環境というところに目を向けて保育者がそこへの意識や知識を深めればいろいろなところにあるはずのことであろうと思っている。

まずその一つは身近に出会ったザリガニが外来種であったというところから、私は食べてしまおうという発想が面白いな～と思ったが、外来種であるということから葛藤の連鎖が生まれている。

それから今度は園で飼おうとしたところ、魚が魚を食べるというようにところで、これも子どもたちにとってはショッキングなことであるが、虫が虫を食べるというように「共生」「食物連鎖」というようなところに子どもたちが気づいていく。そこを子どもたちがそれだけ気づくような場を与えたり、気づくような時を待ったり、子どもの動きに応じながら一緒に考えていくという。オタマジャクシも食べちゃったということで、先回りしないことによって事実と対峙出来ているということが大きなところだと思う。

水族館を作るというようにところは、葛藤というよりはじゃあどうやって作ったらいいのかというようにところであり、逆に水族館がずっとオープンされるわけではないので、どうやってその後しまうのかというようにところにいたり。私はそれでも300名の方がこの水族館を見るというこの巻き込み力ということがすごいな～と思った。

この論文の中で葛藤が4つか5つあるなと思った。特定外来生物というところまで子どもたちと先生たちが問うていくことで、再度水族館で飼いたいけれどということが起こり、そこでオープン後またどうするかというところで、子どもたちが見通しを持ちながら自分たちで責任を持ってやっていくというようところが素敵なところである。

そして、この園の子どもたちは数が多いわけではないがそれでもいろんな意見が出ている。その話し合いを重ねる中で、違う意見を十分に聞いて揺れるというようなことがなされているということが論文の中から伝わってくる。

そして、もう大丈夫だと思ったらまた、オオクチバスがいるという。ここでも生活者だなと思うが、罠作りや堰止めとか、そういう知恵を子どもたちがまさに仕事人というか、子ども自身の手で考えていく。課題に出会った時に、まず課題を無くしてしまうという保育とか、また課題に出会った時に解決のヒントを早く出してしまうと、こうしたものはつぶれていく。それに対してこの園はまさに一緒になって先生たちが、そうしたところも作る方に焦点を当ててプロセスを一緒に探求しているというところが大きな特徴になっていると思う。

そしてその中で自然に「魚のいる川をきれいにしたい」というようなことにも気づいていくということがある。環境教育でゴミ拾いをするというように園でもあって外へ出たりされるわけだが、そのきっかけがどうなのかということか。それに対してこの園では、ある意味こうした積み重ねの中で魚という愛着のあるモノそのモノがいる生き物がいる川をきれいにするという形で、子どもにとってやはりゴミの問題と川の保全ということ必然的につながっていくということである。これが出されている図になるが、心揺るがす様々な体験というところにたくさん葛藤があるということの中で「意欲」から、「葛藤」があって、その中で思いがあり、「意識」がまたそこに生まれていくというサイクルを先生方がうまく捉えているなと思う。その中でこういったことの比較等も上手く先生たちが支えている。ネバーエンディングに一年で終わる実践は多いが、この園は園文化になっていっている。(写真1)

ザリガニとか、身近なところにオオクチバスがまだいるということで、地域にいる多様な生物との共生や、地域の課題というものを毎年毎年受け継ぎながら探求しているということが読み取れるということがすごく大きいと思った。イナゴも食べるし、ザリガニも食べるし、もちろんそのアレルギーの問題とかについても食べる際には細心の注意を払う、そしてそれが受け継がれていく。特定の保育者が用意した課題でそれを毎年やるんですという園は結構あると思うが、地域にいる生物と共に常に取り組んでいくような課題を受け継ぎながら、そしてまた二年生が次の子どもたちに説明していくというような、「子どもから子どもへ」というようなところが大きな特徴だなと私自身見せていただき感じている。

私自身はこの実践が生まれたことそのこと自体に大きな意味があると思っている。あらためてこの論文を何度も読んでみて、ここの園のビジョンというか、教育目標の中に最初から「自分自身も地球の中の自然のひとつであるということを感じられる」とか、「人生における智慧を身に付ける」というようなことが教育目標になり、それがまさに実践に具現化されている。「優しく思いやりがあって」みたいなそういう教育目標ではなくて、これは教育目標をこういうふうにかねばいけないという話しではないが。やはり今私たちが取り組むべきことを子どもたちと共にこんなふうにして欲しいという姿が具体的に出ていていう事がこの支えになっていると思うし、だからこそ科学する心の芽生えと先生方が論文の中で書いたように、「本物の体験の課題解決」というところで、たどり着くためのプロセスというものをとても大事にされている。そして先生たちも記録がとても丁寧に書かれていて、それを読み解きながら科学する心とは何かを解き明かすんだと。初めから今年はこの科学する心を考えようじゃなくて、一つの事例を丁寧に丁寧に進んでいく。丁寧に記録と写真があるということは恐らく「ああそうなんだ」と担任三人がいても応援が必要だ、その間をつなぐ同僚や園長先生と担任集団のつながりであったり、面白いから子どもが夢中になってやっている



(写真1)

からちょっと距離を置いて写真が撮れたり。それからそうした記録を残しておこうという思いが起こる。そういったことがこの実践を支えているのだと思う。

それでは保育者の支援ということがどうかということ、どういう風に子どもが探求したのかということとは今日の発表のプレゼン等で十分に話されていると思う。論文を見て頂くといいが、ブルーの部分に保育者の思いと書かれている部分がある。それを色々読みながら、この園の保育者の先生が科学する心を探求するために、「どういった支援をされたのか」ということを私なりにまとめてみた。

まずはそれを順にご紹介したいと思う。例えば「あの魚何？」と子どもが魚の陰が見つかったという「あれはきっと鯉じゃないかな」という。魚から鯉になっているのだが、鯉を釣りたいということで、「魚が見えた」「それが鯉だ」という、そこから次のやる気が出たようだったと先生が書かれている。いろいろ試行錯誤が始まっていると感じたということで、先生が具体的にその他の場面でもそうだが、具体的に専門的に分けるのじゃなく、わかるためにこれはこうだよって、子どもが言っているというのをさらに答えだけを教えるのじゃなくそれが次へつながるような「問い返し」ということがうまく先生がされている。

これを一つみてもドジョウの色が変わっていく姿だったり、なんて名前なの？といいながらそこに子どもたちが探求をしたり、その一つの問いが次の問いへとつながるような、質の高まる援助を先生が意識をしているというところがとても大事なところだ。

そのために二つ目の援助として、体験や得た知識をきちっと活かすことができるようにと、例えば図鑑を見て魚を調べたり、罨を工夫したりと、言葉で教えるだけでなく子どもたちが繰り返し自分たちで考えられるような形にしたり、さらには先生たちも子ども用の図鑑だけでは限界があることがわかり、図書館に行って探したり購入したりして図鑑コーナーを作って環境を整えた。子どもの方も各自の家から買ってもらった図鑑を持参したり調べたりする姿が増えてきたというようなことが書いてある。その中でご家庭までも巻き込みながら「釣った魚を焼いて食べたい」というような思いが出てきて、子どもが体験やそこから得た知識というものが上手く次につながるリソースというのか、子どもが使えるものを増やしている。私は2021年に出ていたんでしょか。冒険図鑑というものをやかまし村の先生と同じように読んでみようと思って読みましたが、とても幼児が読めるものでは無いけれど、意欲が動機づいているから、これで調べられたんだな～ということも改めてよくわかった。

そして声をよく聞き書き留めるということを先ほどもよく聞くって言われてるが、例えばこの論文の中の保育者の思いっていうところを見て頂くと、子どもがどういう意見を言ったのかということがたいへん丁寧に細かく捉えられている。意見が対立したということだけでなく、捕まえたザリガニが全部飼いたいという思いがある一方で、ザリガニ同士がけんかする様子から、逃がした方がいい、共食いしたら嫌だとか、いっぱいいたらミミズの取り合いになるとか、大きいザリガニには卵があるかもしれないとか、様々な声を記録にとどめている。多様な声をよく聞きながらそれによって次の見通しを先生が立てておられるといったことが論文の中からとてもよく見ることが出来る。また保育者の方が単純に自然環境ということのを大事だっと思うということだけでなく、子どもたちの方がゴミの問題とか自然環境保全への関心も湧いてきていることで嬉しかった。単純に自然への興味だけでなく、そのところからさらにゴミの問題へと子どもの意識が広がっているなあというようなことも、ここに願いが書かれている。広げて欲しいというように、先生の捉えが子どもの捉えているモノを見ると同時にその「アリの目とタカの目」とよく言ったりするが、両方の視点で自然環境保全の知識も持っているからこそ、こういう振り返りの部分が見えてくるんだなということもよくわかる。そして子どもの提案に保育者自身が揺れて、探求したり寄り添うということも、渋谷先生ご自身から語っているが、「命を粗末にするというようなことになるまいか」と先生自身が心配な気持ちも生まれたとか、保育者自身もどうにかして子どもたちの思いを実現させてあげたいというそういう思いを先生自身も子どもと同じ目線で考えていこうというような寄り添い方をされている。そして、自分達で出来ないところを外部の専門家に協力を仰ぎながら捉え、子どもの問いの質を高める。幼児だから子どもの間にはすぐに回答、答えを与えて満足すればいいというような子ども観ではなく、子どもと共に一緒にさらに面白がろうというような、探求しようというようなことが見えてくる。松川飼育員との出会いでも、魚を知るといことである一番必要なことが、子ど

もが水族館の中で例えば「ライトはどうするか」とかいろんなことをやっていく中で結局はやっぱり魚のことなんだと、ライトのことや水槽の大きさのことについても知りたくて、子どもはどうしてもいろんなことをすればいろんなところに気が散ったり興味が向いたり、いろんなお子さんの意見が出てくるが、外の専門家に聞くことで、ここは魚を知るということが一番大事だということがわかり、魚についてもっと調べていくということになる。いろんな子どもの声を聞くということが、拡散にいくのではなく本質がなんなのかということをととても大事に、外の方ともつなぎながら、子どもに説得的につないでいくということも大きな特徴のひとつだと思う。最初はフナだと思っていた魚が「もしかしたら違うかも」と問い合わせている。すると「鯉ですね」ということがわかったことから、子どもがより細部にわたって、もっと魚を見るようになったと書かれている。外部の人に何か知識を与えてもらうという大きな話じゃなくて、まさにもっとどこを探求したら面白いのか、もっと丁寧に見てみようといった意識も、専門家の人と今回はつながって見えてきた。担任だけでやっていくだけではないからこそ見えてきている部分というのがあるのではないだろうか。こうしたオープンダイアログというのでしょうか。開かれていくということも、科学する心という時に「科学者ようになる」ということが単に先生や子どもだけで探求するというのではなく、もっと本物の学び、専門家との学びによって本質を深めていくということがされている。そして、保育者が悩む選択と子どもに救われる経験というの、駆除の話の中で非常に厳しい選択だと感じていたと論文の中でもキレイなサクセスストーリーを論文化しているのではない。先生たちご自身が何に悩んだのかということを書き、しかしながら先ほどもあったハヤタの言葉で保育者も救われたというところである。オオクチバスがいたからいろいろ調べられた、がんばってくれたね〜という子ども自身のオオクチバスへの感謝の気持ちみたいなものを聞き取ることで、保育者が苦悩するのも子どもと共に探求である。また、子どもを信頼するからこそ、保育者がそこで救われていくという姿、こういう経験が毎回日々の保育の中で行われるとは思わないが、こうして子どもを信頼して子どもの声をよく聞くからこそ生まれてきたそういう姿ではないかなと思う。

そして子どもの自然生態系への関心を捉える保育者の意識と書いた。子どもたちの思考の幅が広がって、オオクチバスの繁殖の原因等を考えたり、広い意味での生態系の保全というような意識も持ち始めているように感じている。子どもたちの柔軟な心に保育者は励まされる思いであったと書かれている。こういった自然生態系とか環境保全という意識や視点を持てなければ、こういった経験はこのような形では位置づけられなかったであろうと思う。タケルの話してもそうだが、ナオキが工事をするとう魚の住む場所を壊してしまうのではないのかという会議をきっかけに、魚のことについてのことでなく、用水路や周囲の環境に目が向くようになり、子ども同士が意見を出し合っている姿に頼もしさを感じたとか書かれている。「さあ今日は環境保全について考えましょう」とか、「食物の連鎖がつながっているんですよ〜」といった絵本があったり、そういう知識を与える幼児向けの絵本があるが、そうではなく、まさに子どもたちが自分の目線で地域のことからこういうことに広がっているなと先生が捉えられる。そういう園の視点ということがとっても大きいと思う。

細かなところは読み上げないが、入園式は基本大きなセレモニーとしてみどりの森と同じであれば無いと思うのだが、卒園式の時にプロジェクトの象徴としての「学びの軌跡」が作品になっている。会の始まる前に流れたやかまし村の園歌もそうだったが、自分たちが学んだ軌跡というのが見える化され、そしてアートとして残っていく。それが子どもの学びの自信につながったり、先生方がいつも立ち戻る視点になって残っていくということがとても大事な視点なのではないかと思う。ドキュメンテーションを作るという時も「ドキュメンテーション作りしました、たくさん綴ってあるんですよ」というだけでなく、それが学びの足跡として、この園はこれを大事にしてるんだということで保護者に伝わったり、子どももそこから自信を持っていける。その活用の仕方というのか、最後にここにまとめられていたり、論文化されているとうことで、多い情報をたくさん発信するだけでは無く、凝集していく。そしてそれが深く記憶に残る宝物になっていく。そうした形になっていることも一つの特徴かなと思う。先生ご自身が書かれている言葉であるが「駆除してもこの子どもたちなら大丈夫だという確信を得る」それから自分たちも命と向き合ったのだという実感が出来た。保育者主導ではなく、「結果を導き出さずに子どもと共に悩み考えたことが重要だったのではないだろうか」と先生ご自身が振り返っておられる。そして、探求と

翌年、翌々年へとバトンが渡されていくという。特定外来種という、普通なら幼児が知らないような言葉が一つのキーワードになり、それによって、オオクチバスやアメリカザリガニのことがわかっていく。外来種というのをネットで調べてみると、マンガース始めいろいろなものがある。そうした生物が悪いわけではないけれど、意図的な人の輸出入によってこうことが起こっているということに、子どもが自然に触れられ、それがつながっていくということが大事なんだなあという風に学ばせてもらった。そういうことが論文では5歳児のことしか書かれていないが、3歳4歳5歳と積みあがらなければこうはならない。それがわかるようにと今回の事前資料のクラスだよりを読むと、子どもってたくましいなと思う。命が大事といいながら「イナゴ食べたら美味しい」と言ったというような事例があったり、それから望遠鏡の話では虫眼鏡をもらう、それで終わりにせず、虫眼鏡からさらに望遠鏡を作ってみて、なぜよく見えないのかということが探求に繋がり、そこからさらにこのような(写真2)

きれいなものに繋がっていくというような形で、うまくつながりながら積みあがっていく。だから5歳の探求が大きいのだということだと思う。子どもから子どもへ、今年はホタルということ、種類は違って、ある種自分たちの地域だからこそ起こってくる、そういうものがあるのではないか。

最初に論文から学ぶこととして、「園の教育のビジョン」というものと「科学する心」がどうつながっていて、自分たちはどういう保育実践を大事にしているのかということが、姿ベースで、エピソードベースで見えてくる。そして子どもたち自身が葛藤や課題に向き合いながら、「試行錯誤」という言葉はよく使われるが、わりと試行錯誤というとモノを作るとか、転がし遊びをすることかそういう話が多いのだが、植物や生き物を共に解け得ぬ、共生とか自然の中の関係性だからこそ起こるということを探求していく。そこでの先生の探求の同時進行ということがこれからの私たちの科学する心の中で大事なところではないか。論文の中で保育者のブルーの部分だけを再度読みながらこの園の先生方が大事にしていた「保育者の支援」、「寄り添いの価値」ってなんだろうと、見出しであげたものがここに示している(写真)やはり科学する心の園としての積み重ね、暮らしの中で科学する心を育むということがこの園の特徴だと思う。そのために先生方が「自然が豊かだから」これが出来たとか、「ああいう土地があるから出来たのよね」という見方ではなく、私たちがどの園でも身の回りの自然生態系というものに目を向けることで、蝶がこないから蝶の食草を植えてみようとか、昨日行った園では土や泥はないけれどゴムのタイヤのところで土や泥を多く子どもが経験出来るように置いてみよう...そしたら何が起こるだろうと。ビオトープも立派なものは出来ないけれども桶一つでもブルーシートでやってみよう、そしたらほんとにヤゴがきたとか。いろんなことが意識から生まれるのではないかな。そういったことを刺激してくれるような論文になったんじゃないかなと思っている。本日の保育も聞きながら保育の大黒柱として私が考えたいことは、時間の流れがどうであるのか。場の在り方をどう作るのか。そしてそこに持つ保育哲学を持論として保育者が説明出来たり、周りの人に語るということがこれから大事になってきているだろうと思っている。よく言えば暮らしの場としての園ということの象徴的な姿はやかまし村では見えたのではないかなと思う。近代学校としての学校があり、その就学準備施設というのが、その対極にある。そこでは時間が割られ保育室も一人の担任で場が区切られる。そしてそこでは「保育哲学」というよりも「ある種の目標」というものを達成するというような保育がある。

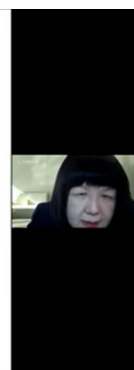
それに対しやかまし村っていうのは子どもも大人も生活者として、地域で環境と共生する。だから今日もあったが、衣食住の中でお店屋さんがあって、木の破片や木っ端から看板が作られたり染物があったり、それから探求しているのも自然の大きな川じゃなくて用水路というもともと地域の人たちがやはり生活のために使う水というところの場に注目というか、出会いながら子どもが追求していくそんな姿がとても大事だなあと思う。本当にこの空間が多様である。やかまし村の園庭はグランド的なものではなく、多様性がある。見てきたものから登るものいろいろと準備され、今日の話しの中で見てきたが、川



(写真2)

の源流を見てきて、それになぞらえながら子どもがイメージを持って追求していくというように園外の地域と園内がつながっている。そこで

水の流れがあり、そこで文化と出会い、かことしさんの「かわ」という絵本。長い絵がある絵本であるが、それに出会うからこそ自分たちも川を描こうということから絵が生まれていく。自然と文化体験が園という場でうまくつながり合いながら、豊かな経験を保障しているのかなと思う。今日は全体として土曜日の限られた時間だったので、ダイナミック



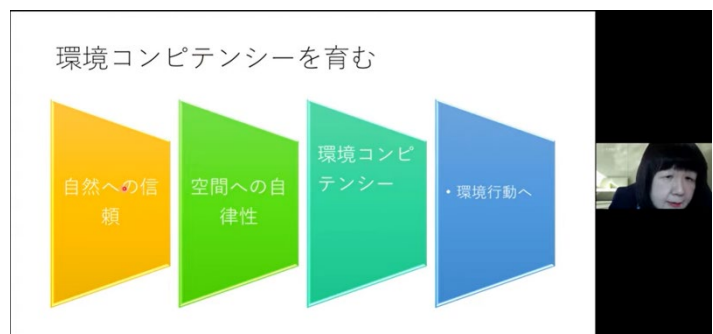
(写真3)

クに遊ぶという時間は必ずしも十分に見えたかわからないのだが、子ども自身が期待を持ちながら、様々な場、用水路だが、この位置取りも素敵だな～と思っている。まずは先生が来て、子どもたちと共に考えていかれている。それもこうした川と、それからこういう川の遊びが繋がったり。これ(写真3)も夜のくるみから冬のくるみへということで、これが望遠鏡の姿とまさに暮らしの中で様々なものを準備していく。そこでも何気ないけれど、子どもたち自身が自分たちで「夜のくるみ」と書いたんだろうとなあと、子どもらしい表現の場でまさに生活の場だなあという風に思った。職員室にも一人1台の机とパソコンではないというお話しがあったが、まさにこの空間そのものが「暮らし」という園の価値を体現しているんだなということがよく伝わってくる。そうした中で染物をしたりという、自然を活かす日本が大事にしてきた価値をまさに具現化している。お店屋さんもそうかもしれない。子どもの日々の生活を生かしながらこうした形で、遊びの中で子ども自身が生み出していく。そうしたことを楽しんでいくという姿がまさにこれも手作りであるし、決められた規制の木ではないからこそ塗りぬくさもあったり大きさも違う中でこんな姿があったりするのかなと思う。キノコのスープもきつとご家庭でみたのか、そうしたものがあるのだと思う。そしてこれもいいなと思うのだが園の空間と外へ出た空間の堺というものが、門はあるがうまくつながりながら地域とつながっている姿である。空間の環境哲学ということだが、私自身が思うのは桑子敏夫さんという方が書いているが、日本固有のやはり大事にしているものとして「風景」という言葉がある。英語ではランドスケープである。風景とはまさに生活者であり、その場の内側から見える一人一人の主観が風景である。全体の計画であったり、どういう風に配置するかではなくて、まさに子どもの目線から見る風景として、おそらくやかまし村の子どもたちの経験というのは忘れられない原風景を生み出していくのではないかな。私自身は今日園にうかがえなかったのは残念だったのではあるが、Facebook 等で見せて頂いている日々の生活等も感じながら思うところである。桑子さんがこんなことを書いている。「空間の履歴とは、空間に関わる人間の行為の基盤である。行為は未来へと目を向けるわけであるが、空間は人間の行為の可能性を未来に向けて拓く。未来と過去を結ぶのが空間の履歴である」(空間の履歴) まさにやかまし村は出来て5年だが、最初は何も無かったところに、いろいろ作りだしながら、そしてあの用水路も釣るといところから、オオクチバスというようなモノとの出会いやザリガニとの出会いから、まさに自分たちの用水路へとになっていき、そしてそれが次の世代へと繋いでいく。そうした空間から見える園の風景というものを作り出しているんじゃないかと思う。そしてその風景それぞれにエピソードが子どもに刻まれるということがとても深い学びを生んでいるのだと思う。多機能的に広い場が単に作られるというだけでなく、なんでもありのグラウンドであったり、なんでも出来るホールということも便利ではあるが、そうではなく、まさにここの場にはこんな思いである。そんな空間を生活を通して作っていつている。それが今日の保育だったのではないかなということを感じながら映像を見せて頂いた。

これからに向けてということで、これは私が作っている造語であるが「自然環境感受性」ということを子どもの乳幼児期に高めていくということが、これから持続可能な地球環境を担う一人の市民として大事なんじゃないかという風に思っている。乳幼児期からの ESD や SDGs の大切さ。持続可能な社会や持続可能な地球のためのことは近年声高に言われるようになってきている。私たちも園庭調査するとい

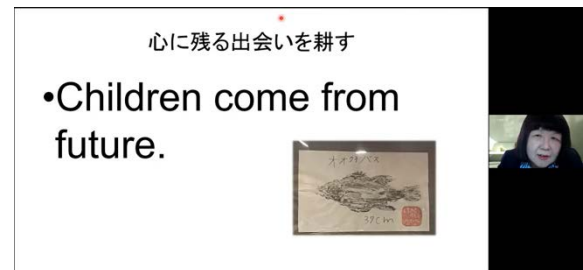
うようなところから環境保全の重要性等も書いているが、その時思ったのは、大人のSDGsやESDありきという概念から子どもを見ている。それに対して風景であったり環境感受性っていうのはまさに子どもが何を感じたり、考えたのかということから出発して子ども目線の環境から環境の探求が始まるということが大事であると思う。それがレイチェルカーソンのセンスオブワンダーのセンスだと思う。驚きに目を見張るという時にその驚きの質としては驚嘆もあれば恐れや不安もあり、一方で喜びや楽しさもある。今日、先生が言われました人にこの思いや驚きを伝えたいとか、見て！とか仲間と共有したいと思う。そうしたところでセンスというものが日々に溢れていくことで磨かれるんじゃないかと思う。子どもはみんなセンスオブワンダーを持っていますというのではなく、子どものセンスは感じたものをそれを受け止めたり、対話することによって磨き、研ぎ澄まされていくのではないかな。今世界的には教育の中では、エコシステムアプローチということが言われるようになっている。そのエコというのはやはり地域に根差すということである。それぞれの地域によってその特色は違うわけであるから、その園の地域の自然環境や社会文化的環境、それを支える保護者や地域や、今日の松川さんのように地域の環境保全とか文化の専門家に支えられ、さらにはそのSDGsやESDの思想を共有する社会を作っていくという文化の中にあるわけだが、まさに子どもを中心にしながら時間と共に、子どもの育ちと共にこうした感覚を育てていくという発想が大事であると思う。宮城の仙台の泉区のかましまし村と今日ご参加のそれぞれの地域は違うと思うが、自分の地域に根差す自然や文化というものを捉えていきながら、そこから探求していくということ、そして長期的な視点を見据えていくことが大事であると思う。それはエコシステムでは自然は多様であること。国際的に見ても国内でも、地域によって自然は多様であるから、そこにいる生物も多様である。しかし、都市化によってこの生物多様性というものの環が途切れている。この生物多様性というようなことを感じられる場を作っていくことによって種の多様性、一人一人も実は違うんだよねとか、同じ植物でもこれはこんな植物なんだよねというようなそこへの感受性も育んでいくということが重要だろうと思う。

これはヨーロッパの乳幼児教育学会の論文に載っていたものだ。(写真4) 環境コンピテンシーというのは自然への信頼から生まれる。自然は危ない部分もあるけれど、いろいろ豊かなことを私たちに与えてくれるという信頼から、空間で自由に遊んだり出会ったりする。その中で環境コンピテンシーと言われるものが、特に自然環境の中で育っていく。だからこそその環境を保全しようとするよう



な行動が生まれるのだというようなものが育ちと共にこの写真の順番のように育ってい (写真4) くだろということが日本だけでなくヨーロッパでも議論がされている。多様性の保障がそれぞれの良さの受容性につながるということを園庭の調査をした時に学んだ。園庭が広いということはいいいことではあるが、広さ以上にその環境の中に例えば植栽であったり、そこに集まる虫であったり、生き物であったりどれだけ多様かということこそが子どもの経験を豊かにする。保育室の中も戸外も人工物も自然物も、多様性が保証されているのか。いつも決まった保育は安定できる。しかしながら多様であるからこそ、それぞれが選んだもので遊んだりしていく活動もまた多様になっていく。また人間は生き物であるから、多様な動きを保障する空間を作り出していくということが大事である。今日のやかまし村の園庭を見れば非常にいろんな動きが、自然というだけじゃなくて、自然と出てくるということがおわかりいただけるのではないかな。そういう中だからこそ、子どもの行動が多様になりそれを柔軟に入れて受容していく。これからはこの多様性の保障の時代というところに来ているのではないかな。自然環境感受性というのはマリー・シェーファーという人が音環境感受性という言葉を使っている。スタンドスケープの理論という音楽の所で耳をそばだててみる。誰が一番何が聞こえるかなとか、黙って立ってみようといった時に何が聞こえるかなというような耳を研ぎ澄ましてみることからいろんな感受性が育っていったりする。それが音風景とそのデザインという考え方である。私自身は音だけでなく、色や匂いや手触りや

味などについて戸外環境を子どもが自然の風景として感じながらその感受性を高めていくというようなことを自然環境感受性と今呼ぼうとしているが、そうしたことを育てていく。環境感受性が子どもの探求行動を生み、そしてそれが環境保全へと繋がっていくんじゃないか。最初からこの理念を振りかざしていくのではなく、まさに子どもの目線であれ？良いなって色んなものと出会うそのためには当然園庭や地球環境の多様性と出会うこと、そして保育者の専門性こそ大事なのではないだろうかと思っている。これが最後のスライドになるが（写真5）**Children Come from future** いろんなところでもお話ししている。子どもは未来を担うのではなく、私たちにこれからの未来の在り様を子どもが見せてくれている。私たちは子どもたちから学ぶことによって、一緒に探求し、共に未来を作っていくのだと思う。心に担う、心に残る出会いを耕していく。それはまさにオオクチバスとの出会いというこの実践から私だけでなく、今日ご参加の皆様とも共有しさらに科学する心とは何なのかを一緒に考えていけることを嬉しく思っている。こうした機会を準備してくださったやかまし村の皆さんやソニー教育財団に御礼を申し上げたいと思う。



（写真5）